

編集後記 座談

1年半の
制作過程も
ふりかえって



正木 こう言っちゃうとあれなんですけど、最初は遊び半分の気持ちだったんですが、改めて地域の人と深く話し合っただけ交流を深めていく中で、その遊びの感覚のなかでも、自分の好きなことを通して、町に少しでも役立つようなことをできたのが、今後の人生の糧になりました。

——「町の役に立っている」というのは、どういう手応えなんですか？

正木 この町の魅力だったり未来を考えたりして、この本を通して、それを伝えることができるんじゃないかなと感じました。自分は、こういう公共的な町のプロジェクトに参加したことがなかったのでも、自分も楽しみな



がら、誰かのためにもなっていくということを知れて良かったです。

—— インタビューの聞き手役をやってみてどうでしたか？

正木 みなさん、優しかった。普段から年上の方と交流する機会はあるんですが、自分から話すことはあんまなかったんで、いざ話してみたってなったら、この町の人の話しやすさみたいなのを感しました。

—— 写真撮影していて感じたことはありますか？

中山 めっちゃ楽しかったです。なんか仕事っ

ぱく写真を撮影するのは初めてだったんですけど、でも、自分が楽しみなからじゃないと、自分の納得した写真って撮れてないから……。でも、その場自体が楽しかったから、納得のいく写真が多くて、今回。それも、すごい良かったなと思って。

—— 今、大学で写真を学ばれていると思うんですが、写真に対する向き合い方の変化はありましたか？

中山 久山は、いろいろと新しくなったり変化したところはあるけど、でも、人と人の関わり方とかは全く変わってないなっていうのが今回のインタビューを通して分かったから、なんかその、変わってるけど変わってないところを長く撮り続けられたら楽しいだろうなっていうのをちょっと思

いました。

——写真家としての自分なりのテーマが見つかったということでしょうか？

中山　なんかやってみたら楽しいだろうなって思いました。

——今回の撮影をしながら感じた楽しさって、どういふものだったんでしょうか？

中山　インタビュ―先の保護者の方々とか、おばあちゃんたちのお話に共感することが多くて、「確かに」って思いながらずっと聞いていて、なんかどの年代も思っていることが同じなんだ

なって。で、やっていることも、会ったらだべるとか、みんな同じだったから。

——顔を合わせれば、だべる。つまり、語り草が生えていくという。

中山　同じ話題で共感するものがあるから、どの世代でも仲良くなれるんだろうなって。猪野川とか、トリアスでよく会うよねとか、レスポで遊んどったよねっていうのが、みんなあるから・・・。そういうのがすごい大きい。

——共通の話題があるというのも、会話のしやすさを生んでいるのかもしれないよね。聞き手役をやってみてどうでしたか？



秋山 20数年、久山で生きてきたけど、ああやってお話を聴けるのは、一回もなかったし、自分にとって貴重な経験。

——インタビュー中にたくさんメモしていましたよね？

秋山 全員の名前とエピソードをメモっていました。やっぱり名前で呼び合える関係になりたいし、インタビューで全員の話を聞きたかったから……。

——どうでしたか？

秋山 良かったですし、今、就職活動中なんです

けど、それにも生かされるなって思いました。

—— どのようなところに、そう感じますか？

秋山 相手の言葉を自分の言葉に置き換えながら、内容を理解するっていう・・・。

—— それは就活に限らず、相手に真摯に向かい合うということですよ。

秋山 そうですね。

林田 就活は、わたしもぼちぼち始めて、その、なんだろう、自分の興味がある分野が、このプロジェクトを通して地域活性化とか、まち

づくりとか、そういうのもあるんだなって気が付きました。そっち方面にもちよつと視野を広げていけたらなっていうのは思います。

—— こういう活動が、地域活性化やまちづくりにつながる感覚があるということですよ？

林田 はい。もう生まれてからずっと久山にしか住んでないから、その久山が好きなのは当たり前かもしれないんですけど、住んでる人たちの暮らしや歴史を知っていったら、愛着とか好きな気持ちができるのかなって思います。

—— 愛着や好きな気持ちを耕していくのも、まちづくりということでしょうか？

中野 そう、思いますね。水道とか道路とか、そういうインフラは、人が最低限生きるための整備。それもまちづくりなんですけど、こういうまちづくりは、人がより楽しく、豊かに生きていくためのもの。そういうことを、このプロジェクトを通してちょっとずつ思うようになっていました。

—— まちづくりも何か建物などをつくって終わりではないように、本づくりも完成した後が大事だったりすると考えています。完成する本を、こんな人に読んでもらいたいとか、こういう読まれ方をしたいというものはありますか？

中山 インタビュー取材でも、結局みんな、な



んとなく良かったから久山を選んだという話が多かったから、まずは、「なんとなく面白そう」で読んでもらえれば……。なんか、そこから広がっていくかなって。久山を言葉で表すときにどうやって言ったら良いんだろうっていうのがあって、それを伝えるのが難しくて……。久山って、多分、一緒に輪に入ってもらわないと分からないっていうのをめっちゃ思ってます。だから、誰でもパッと見てなんか面白そうって思った人が読んでくれれば嬉しいです。

—— 中山さんの写真で、その「なんとなく」というムードが伝わるものになったように感じます。

中山 そうだと嬉しいです。

林田 わたしは、同世代とそれより下の世代に読んでもらいたいです。普通は、行政が出した本を若者がわざわざ読むっていうことはあんまりないかなと……。でも、こういうかわいいやつだと、読む気になる人もいるかもしれない。ちょうど私たちの世代って、進学とか就職で外へ出ていくタイミングの人も多いと思うから、そのときに読んでくれたら良いかなって思いました。自分たちが育った町がここで良かったなって改めて思いやなくなるかもしれない。

中野 僕らが小・中学生の頃って、久山のことをただのド田舎としか思ってたと思うんですよね。大人になってきて町の政策とかも分かってくると、また変わってきますよね。そのところを



噛み砕いて、実はこうなんだよっていう町の歴史を残しているこの本で、高校や大学に進学したと
きの同級生からの何も無い町っていう「久山いじ
り」に耐えてほしいですね。

みんな あははははは。